(『国語学』第51巻2号　2000・9・30)

語　彙（理論・現代）

山田　進

あたえられた題目を，「語彙に関係することがらの理論的考察，および現代日本語の語彙に関係することがらの具体的記述」と理解し，「語構成・語形成」「語の意味」の領域を中心に，1998・1999年中に刊行された単行本および定期刊行物所収の論文をとおしてみた「(国語) 学界」のおおまかな様子をしるす。

全体的なながれ

このところめにつくのは，「反ソシュール主義」とでもいうべきながれである。牧野成一「音と意味の関係は日本語では有縁か――鼻音 vs. 口蓋音と文法形式のケーススタディ」(『言語学と日本語教育――実用的言語理論の構築を目指して』くろしお出版，1999.1) は，「音と意味の関係は de Saussure の主張に反して，かなり有縁なのではないか」という想定のもとに，「の/こと」「ので/から」「ものに/けれど」「ものだ/ことだ」などの文法形式を分析し，つぎの仮説を提案する。「ぬらぬら，めらめら/かちかち，がちがち」など，「[m] [n]/[k] [g]」という音形で対立する擬音語・擬態語についてみられる意味的対立，すなわち鼻音の「触角性，暖かさ，粘着性」と口蓋音の「堅さ，鋭さ，明晰さ，切断，離反」との対立が，「相対的な距離のなさ，すなわち，引き込み性があること」対「心理的な距離感，すなわち，引き込み性がないこと」という意味的対立となって，文法形式にもつかわれているという仮説である。この意味的対立によって，たとえば，「リサはトムが帰ってくる{の/*こと} を待っていた」で「待つ」が「こと」をとれないのは，「待つ」の「意味内容は『だれかが何か来るのを今か今かと期待していること』で，引き込まれの心理を表わしているから」であると説明される。また，本来の名詞としての「もの/こと」には，「感覚で捉えられる物体/感覚で捉えられない，あるいは捉えにくい現象や事態」という意義素の対立があり，この「基本的な意味からのメタファーとして『もの』と『こと』にはさまざまな用例がある」が，これらは「表面上多種に見えても，底をながれるものは意義素の違いと音象徴の違いだけである」という。牧野自身がいうように，「反例もたくさんでてくる」ことはたしかであるが，「音と意味の緊密なイコン関係は擬音語，擬態語だけでなく，それを超えても存在するという主張は，どうやら，少なくとも日本語の鼻音 vs 口蓋音においては正しいのではないかと思われる」という牧野の議論は，おおくの用例にささえられて説得力をもつ。

田守育啓・ローレンス・スコウラップ『オノマトペ――形態と意味――』（くろしお出版，1999.3）は，擬声語・擬態語および音象徴についての研究である。田守・スコウラップは，たとえば「唇音」と「肥満・突出」とが音象徴的対応をみせるとして，marumaru, bukubuku, zuNguri, poQchari などのオノマトペ語彙をあげ，さらに，「肥満を表す日本語の少数の一般語彙」も音象徴的要素をふくみ，「futoi, futoru, fukureru, shiboo, himaN にみられるように，ほとんどの場合，唇音が隣接して」いると指摘する。同書は日本語と英語の対照研究で，田守らはその分析にもとづき，音象徴は個別言語に特有のものでなく普遍的なものである，という想定をしている。この点を牧野の主張と対比すると興味ぶかい。なお，語彙に直接関係はしないが，藤田保幸「引用構文の構造」（『国語学』198,1999.9）は，引用構文の引用部の意味的性質が「イコン」であると想定することによって，引用構文の諸特徴に，明快で説得力のある説明をあたえている。心理学の分野での研究であるが，苧阪直行編『感性のことばを研究する：擬音語・擬態語に読む心のありか』（新曜社，1999.7）もオノマトペをあつかい，参考になる。

反ソシュールのもうひとつのながれは，「認知主義」である。言語記号と外界との関係をとらえるのに人間の認知作用を介在させたり，認知と言語との接点あるいは「インタフェイス（interface）」にめをむけたりする研究がめだっている。それに関連して，「パロール」のレベルと「ラング」のレベルとが峻別されて別個のものとしてあつかわれるのでなく，ラングの知識がどのようにパロールとなって実現するのか，あるいはパロールがどのようにラングとむすびつけられるのか，などに関心がむけられる。そうなると，結果的に人間の心理や，レベルの変換にともなう「計算」などにめがいく。心理学・コンピュータ科学など他分野の「認知主義」とかかわりをもつ研究は，国語学界全体としてみれば少数派であるが，その影響力はちいさくない。

金水敏「日本語の指示詞における直示用法と非直示用法の関係について」（『自然言語処理』6-4,1999.7）は，「言語表現と外的世界をつなぐ位置に中間構造としての心的表示を仮定」し，言語表現を「心的表示への操作（登録，検索，マッピング等）の指令，あるいは，モニター装置」と位置づけるもので，認知主義的な研究のひとつの見本となる。金水は，指示詞のみっつの系列（コソア）の性質について，特にコア系列とソ系列との質的なちがいに焦点をあて，コア系列が本質的に「直示」であるのに対し，ソ系列が本質的に「非直示」であると論じる。ここで，直示は「談話に先立って，言語外世界にあらかじめ存在すると話し手が認める対象を直接指し示し，言語的文脈に取り込むことである」と定義される。コ系列の文脈指示用法を「直示」とみなす点，およびソ系列の「非直示」の本質とソ系列の現場指示用法の「非直示」の性質との関係，などさらにかんがえるべきであるが，ソ系列の「非直示」の本質の主張には多々うなずけるものがある。

認知主義的な研究はかならずしも心理学・コンピュータ科学によりそうものばかりではない。「認知主体」が，外的な対象を「こころの内部で」「どのように認知するのか」

についてのモデルをかんがえるという態度でのぞむ研究を認知主義的とするなら，むしろ，「非人文系」諸学とは直接かかわらない研究のほうがずっとおおい。この種の研究については，分野別のところでとりあげる。

語構造・語形成

野村雅昭「サ変動詞の構造」(『日本語研究と日本語教育』明治書院，1999.11) は，いわゆるサ変動詞の語基にみられる，構造的・意味的な制約を論じる。特にサ変動詞語基の大部分をしめる「2単位の複合語基」の構造を，語基の意味類型と結合関係により整理して，くわしく分析する。『分類語彙表（増補版)』にもとづく約7700語という大量のデータから，さまざまな知見があたえられるが，特に和語語基と字音語基との比較が参考になる。ただ，野村自身が指摘するように，「字音語には中国語起源のものと日本製のものとがあり」，その影響をさらにかんがえる必要がある。この方面に関するものとして，陳力衛「語構成から見る和製漢語の特質」(『東京大学国語研究室創設百周年記念国語研究論集』汲古書院，1998.2，以下『東大百年』) があり，和製の主として二字漢語の語構成の特徴が，中国語の語構成との比較をまじえて論じられている。

サ変動詞語基には，統語的な結合関係を明示する形式的特徴がないので，統語関係は意味によって判断することになる。野村は，ガ・ヲ・ニなどの格関係がみとめられるものを「補足関係」とよび，動詞後続型の「息切れ/荷造り」などを例にあげる一方，動詞先行型の「打ち水/接ぎ木」などは「明確に格助辞を指摘しにくい」として「修飾関係」に分類する。後者の「複合語基」は，「複合名詞」としても独立してもちいられる。西尾寅弥「『摘み草』タイプの複合名詞について」(『大妻女子大学文学部三十周年記念論集』1998.3)は，そのような動詞先行型の複合名詞のうち，「前項の動詞が意味の中心で，後項の名詞はそれを補足している」タイプを，「『摘み草』タイプの複合名詞」となづけ，例をひろくあつめて考察する。「摘み草」はサ変動詞の語基ともなり，これは野村式にいうと「補足関係」になるが，西尾は，これには「『草を摘むこと』のように対格助詞が『を』の関係が想定できる」とする。このように，複合語の構成要素のあいだにあると想定される「統語関係」の分析はなかなかに厄介である。

「複合」という語形成のプロセスを「理論的に」考察する論もめについた。松本曜「日本語の語彙的複合動詞における動詞の組み合わせ」(『言語研究』114,1998.12)は，「たたきおとす」「かけあがる」など，「動詞＋動詞」の複合語について，動詞の組み合わせにかかわる制約を，「項構造」のレベルではなく，「意味構造」のレベルでとらえるべきだと主張する。ひとくちに項構造といってもその定義や表記は論者によりことなる。松本自身は項構造での分析を否定するのだが，ひきあいにだす項構造は，影山太郎『文法と語形成』(ひつじ書房，1993) によるもので，「読む」などの他動詞を「x 〈y〉」，「走る」などの「非能格動詞」を「x 〈 〉」，「落ちる」などの「非対格動詞」を「 〈y〉」と表記し，

xを「外項」，yを「内項」とよぶ。そして，「複合動詞は外項を取る動詞（他動詞と非能格動詞）同士か，外項を取らない動詞（非対格動詞）同士によって作られる」という「他動性調和の原則」がみられるが，それは複合が項構造レベルでおきるからだという影山の主張をしりぞけ，複合は「意味構造」レベルで生じるのだと論じる。「意味構造」の表記についての説明がないので，意味構造自体の妥当性について問題がのこるものの，綿密な分析と論証はよみごたえがある。

小林英樹「語彙概念構造レベルでの複合」（『日本語科学』5,1999.4）は，「（企業を）意識改革する」「（アメリカに）工場進出する」などの四字漢語の複合語は，「項構造」では分析できないが，「語彙概念構造【ACT，BECOME，CAUSEなどの基本的述語，x，yなどの変項，および特定概念をしめす定項をくみあわせ，語の意味のある面を擬似的な句・文のかたちで表示する構造――山田】」をつかうと，「法律改正する」など項構造レベルで分析可能な複合語もふくめ，すべての項関係の複合語を統一的な原理で説明できると主張する。小林の議論にはなるほどとおもわせるところがあるが，私見では，例示される複合語はすべて，「xが（y'の）yをVNする→xが（y'を）yVNする」「xが（xの）yをzにVNする→xがzにyVNする」といった「表面的な統語関係」をもちいて説明できる。この関係にもとづくと，小林が項構造で分析できないという「日産がアメリカに工場進出する」を「日産がアメリカに工場を進出する」をもとにつくることができる。

ただし，小林の議論は「日産がアメリカに工場を進出する」を「非文法的」とする前提にもとづくので，そうであればたしかに統語構造では分析しにくい。小林とことなり，「工場進出する」は筆者にはやや不自然に感じられる。「極言すれば，文については，〈文法的〉か〈非文法的〉かで判断が下せる。しかし，語については，〈実在する語〉か〈可能な語〉か〈不可能な語〉かで判断を下さなければならない。〈可能な語〉をめぐっては，そう簡単に判断は下せない。これは，語を分析対象とする研究の宿命である」という小林の言にはうなずけるところがあり，「個人差」がでやすいことはあるかもしれない。小林はこの複合語の「実例」をあげていないが，類似の「資本進出」については「朝日新聞」からの例をひいている【この論文では，実例がすべて「朝日新聞」からである。これらはおそらく電子媒体によるデータにもとづくとみられるが，そのことわりはない。――山田】。新聞記事の複合語には臨時的なものもかなりあり，やや特殊な性格をもつといえるのではないか。「進出する」については，「夕張市に工場を進出する」「人口急増地帯に競って支店を進出した」などの「他動詞」の実例がある（朝日新聞Digital News Archives for Librariesによる）。この種のデータを利用する研究がめにつくが，データの性質を十分に吟味することが必要である【「工場進出（する）」の語彙概念構造は［x CONTROL［x CAUSE［BECOME［［工場 OF x］BE AT z］］］］とされる。なお，語彙概念構造表示では，「語」と「句」の区別がしめされないので，これは「xの工場をzに進出する」という「他動詞」の語彙概念構造の表示ともみることができる。――山田】。

諸論考からうかがわれるように，複合や派生による語形成には語の意味が中心的な役割をはたす。個々の語の個別的な意味特徴がしばしば語形成の可否に関与することがあるので，あつかう対象の意味の性質はできるだけ網羅的にしらべる必要がある。姫野昌子『複合動詞の構造と意味用法』（ひつじ書房，1999.2）は，「～あがる/こむ/だす」など複合動詞の後項になるもののうちのおもなものをとりあげ，複合の様子をこまかいところまでくわしく検討するもので，こうした着実なしごとは貴重である。

影山太郎「日英語の名詞化と有界性」（『人文論究』49-2,1999.9）は，動詞から派生する日本語の連用形名詞について英語の動詞派生名詞と対照し，「香り/包み」など具体的個物をあらわすモノ名詞は英語にくらべると極端にすくなく，ほとんどが「釣り/遊び/あらそい」など行為や程度をあらわすデキゴト名詞であるという観察をする。影山は，動詞からの派生名詞は，動詞の「行為→変化・過程→結果・状態」のどこを「プロファイル【うかびあがらせること――山田】」するかで，モノ名詞とデキゴト名詞のちがいが生じるとし，英語の派生名詞にモノ名詞がおおいのに，日本語の派生名詞にモノ名詞がすくないのは，ものごとに境界があるかどうかという「有界性」における両言語のちがい（ものごとの境界をはっきりさせる英語の「スル型」にたいして，日本語は，境界をはっきりさせない「ナル型」）にもとづくのだと主張する。対照分析の効果があらわれた論考である。

語の意味

語の意味について，「多義」を論じたものがめだつ。渡辺実「多義語の意義の位置づけ」（『東大百年』）は，「刺/差/指/挿/注」などの漢字でかきわけられることのある基本的な動詞「さす」を多義語としたうえで，その意味の関連の様子を詳細に分析する。そこでは，「Ｘガ Ｙヲ Ｚニ Ｗデ」といった統合的な型（渡辺の用語では「関係項目」）のちがいは最大の意味のちがいをもたらし，ＸやＹに具現される個々の語・語句である「素材」の意味的な特徴（渡辺の用語では「素材属性」）のちがいは最小のちがいをもたらすという観察がある。たとえば，「出刃包丁を賊の背中にさす」と「出刃包丁で賊の背中をさす」とは「関係項目」がまったくちがうので，このふたつの「さす」は意味が非常にはなれた位置にあるという（前者は「移動」で後者は「加害」）。一方，このふたつはともに，「素材属性」として「先の尖ったもの」「奥行きのある柔軟なもの」などを共有する。そして，「関係項目」の相違にかかわらず，多義語の意味が関連しあうのは，「素材属性」のはたらきであり，「意義構造の底部で息づく素材属性こそが，多義の分化をつないでいるものらしい」という。この事情が，他の動詞についてはどうなのか，素材属性を中心にする名詞やその他の品詞についてはどうなのかなど，さらにかんがえるべき材料を提供する論考である。

柏野和佳子・本多啓「IPAL 名詞辞書における多義構造の記述」（『情報処理学会論文誌』39-9,1998.9）は，計算機でのとりあつかいを念頭においた，多義語の複数の語義のあいだ

の関係についての体系的な研究である。わずかな語についてのすぐにおもいつく典型例だけをあつかうのでなく，多数の語を網羅的に記述することで説得力のある議論を展開する。多義構造を比喩による意味拡張の観点から分析していて，比喩の研究にもみとおしをあたえる。多義語のそれぞれの意味が「比喩的な関係」でむすばれているというのは，これまで暗黙の了解であったが，柏野・本多は「IPAL 名詞辞書」の多義語 560 語についての「多義構造【意味関係によってむすばれた語義間のつながり具合――山田】」について定量的な分析をおこない，多義構造の約 86%が，比喩による拡張として記述できるとする。名詞の意味についてこれだけまとまった考察はこれまでなかったのではないか。

鈴木敏昭「多義語における類似性と差異性」（『富山大学人文学部紀要』31,1999.3）は，「語の二つの意味が多義と捉えられるためには，それらに対応する概念がことなったカテゴリに所属することと同時にそれらが十分に類似していることが必要になる」という，「類似性と差異性」の観点から，多義語の基本義と派生義の関係を実験にもとづくデータにもとづいて考察する。実験は，たとえば基本用法「人間の足」に対する派生用法「犬の足」「椅子の足」について，被験者にそれぞれの用法についての，性質・特徴を箇条書きにさせる「特性列挙法」をつかい，えられたデータを一定の計算モデルにしたがって分析する。実験的な手法による言語データの分析はしばしば，「常識をうらづける」だけの結果におわることがある。ところが，鈴木の実験では，基本義と派生義に共通の特性がおおいほど，つまり「重なり度」がおおきいほど，類似度がたかいとの予想は否定され，「そもそもこの重なり度を類似性の妥当な指標と考えていいのかの検討が必要になる」として，いくつかの可能性が検討される。類似性と差異性が問題になる多義性は，比喩と密接な関係があり，比喩理論との関係もくわしく検討されるなど，心理学で開発された手法にもとづく鈴木の論は，多義をめぐるおおくの論とはひとあじちがったものになっている。

野林靖彦「類義のモダリティ形式『ヨウダ』『ラシイ』『ソウダ』――三水準にわたる重層的考察――」（『国語学』197,1999.6）は，「ヨウダ・ラシイ・ソウダ」について，既成の記述が「状況/本質/運用」のどれかひとつの面にのみ注意しているため，みっつの形式の意味の複雑なからみあいを十分にとらえられない一面的なものであると批判し，みっつの面のすべてに注意をむけて記述すべきだとする。野林によると，状況面とは使用状況の区別がおこなわれる水準，本質面はラングの水準，運用面はパロールの水準に相当するとされる。具体的な語の使用および使用状況と，その使用の背後にある「不変体」とを同時にしめそうとするこころみには興味をひかれる。

野林の論は，ある語が具体的文脈に生じるときの意味と，それが文脈をはなれてもつと想定される意味とのふたつのレベルをみとめ，そのつながりの具体的な記述をこころみたものと解することができる。方法はことなるが，久島茂「『我慢する』及びそのアスペクト形式の意味」（『静岡大学教育学部研究報告　人文・社会科学篇』48,1998.3）も，「我慢

する」という動詞について，その具体的用法の意味実現のありさまを，統合型のちがいおよび文脈の影響とのかかわりの観点から，こまかく分析している。「ガマンスルの否定形ガマンシナイは，行為を行わないという単純な否定の意味にとどまらず，〈気持ちを抑え付けないで行動に移す〉という肯定的意味を持つ。ガマンシテイルの否定形ガマンシテイナイは，行為の継続中でない意味とならず，〈気持ちを抑え付けていないで行動に移す〉という肯定的，かつ（シテイルでなく）スルに近い意味となる」という観察，およびその理由についての議論は，動詞の意味分析一般につながる示唆をふくむ。

個別の語の用法を整理し意味を記述するタイプの論を，「一般性」につながらない，価値のひくいものとみるむきもあるが，考察すべき語はきわめておおく，分析がおよんでいないもののなかに，意外な性質をみせるものがある可能性は十分にある。少数の例からかんがえられた「一般性をもつ記述装置」が，分析されていないその他の例にあてはまる保証はない。たとえば，「我慢する」のアスペクト面でのふるまいを「語彙概念構造」のたぐいで表示しようとしてもむずかしいのではないか。一般的な言明につながる「語法研究」はどしどしおこなうべきである。

国広哲弥「日本語動詞の多義体系（1）」（神奈川大学『人文学研究所報』32,1999.3），同「日本語動詞の多義体系（2）」（神奈川大学『人文研究』138,1999.12）は，現行の日本語あるいは英語の辞典の多義語のあつかいが不備であるとして，「究極的には日本語の多義語のすべてを記述しなければならない。その大目的に近づく一歩としてこの論文を提出する」という。国広は「基本義か筆者のいう現象素（cf. 国広 1997【＝『理想の国語辞典』（大修館書店）。このなかでは「語の用法と結び付いた外界の現象・出来事・物・動作など，感覚で捉えることのできるもので，言語外に人間の認知の対象として認められるもの」と規定される――山田】）をまず設定し，そこから意味的あるいは認知的な関連性を確かめながら多義を配列してゆくべきである」といい，「あおぐ，はずれる」などの動詞の記述例をしめしながら意味記述の理論的な考察もあわせておこなう。

ひとつの語の多義のつながり具合が，しばしば，「転用」といういいかたで表現されることがある。多義のつながり具合が論じられるとき，一般に，「ある意味が別の意味にどのように転用されているか」という共時態における意味のつながりが，「どのように転用されたか」という通時態とは独立に，それそのものとして考察される。共時態での転用は，「共時態における合理的解釈」にもとづいて認定されるが，この合理的解釈を「人間の認知作用の一般的傾向」と関係づけてかんがえるとき，「転用」は，時代・地域・言語をこえて適用できる概念となる。大堀壽夫編 *Studies in Japanese Grammaticalization――Cognitive and Discourse Perspectives――*（くろしお出版，1998.3）は，「動詞テ形の後置詞化」「名詞ワケの文末詞化」などの「文法化」現象にみられる意味転用を，通時論・共時論・類型論の見地から考察し，これらみっつのたちばからの研究が，たがいに他を益するようになっている。通時的な研究ではデータの解釈が一層重要であり，「国語学」の「史的研

究」との連携がのぞまれる。

「ところ」のように，ある語が空間的用法と時間的用法をあわせもつとき，空間的用法が基本的で時間的用法が派生的である，ということは「通説」となっている感がある。定延利之「空間と時間の関係――『空間的分布を示す時間語彙』をめぐって」（『日本語学』18-8,1999.8）は，通説がよりどころとする，「人間にとって空間は時間よりわかりやすく基本的」であるという趣旨の「認知的動機」に疑義を表明し，基本的に時間をあらわす語がある条件で空間用法をもつ例――たとえば，「さっき，レストランがあったけど，あそこはおいしいの？」という文の前半の解釈は「今はもうないが先刻はあった」ということでなく，「さっき」は時点ではなく「少し戻った地点」をあらわす――を検討したうえで，人間の行動場面には「時間のほうが空間よりわかりやすい」ことがあり，そうしたときに『空間的分布を示す時間語彙』がつかわれるのだと主張する。

「人間の認知」を前面におしだして議論する「認知意味論」のたちばにたつ定延の「解釈」にはなるほどとおもわせるものがある。なお，「認知意味論」のいう「人間の認知活動・認知作用」は，どのような観点からも認証されるような「事実」ではないだろう。どのような対象であれ，それをなんらかのたちばからとらえて「解釈」するよりほかにないのであって，人間の認知活動・作用が「実際のところどうであるか」はとりあえず問題にならない。ある課題に対しての「絶対的な正解」はもとめても所詮はかなわぬことであり，できるのは，対象を一定のたちばからとらえてしめすこと，すなわち対象についての解釈である。大切なのは，いかに「よりよい解釈」を提示できるかであり，このことは，認知意味論にかぎらず，あらゆる「研究」にいえることだとおもう。

「隠喩（メタファー）/換喩（メトニミー）」といった比喩に関する概念をもちいて，多義語や慣用句を論じるものもめだった。具体的な表現を比喩のどのタイプとみるかについて論者のあいだで一致しないことがままあるが，その一因に比喩の定義が明確でないことがある。とりわけ，換喩と提喩の区別が問題になることがおおく，籾山洋介「換喩（メトニミー）と提喩（シネクドキー）――諸説の整理・検討――」（『名古屋大学日本語・日本文化論集』6,1998.10）は，この点をあきらかにするうえで参考になる。提喩については，森雄一「提喩についての一考察」（『明海日本語』4,1998.3）が，提喩のふたつのタイプ――「食事→ご飯」のように，より一般的な概念をより個別的な概念で代用するタイプと，「雪→白いもの」のように，その逆の方向で代用がなされるタイプ――のつかわれかたの条件を検討し，これまであまり注意されなかった，「（久しく訪れなかった店で）百年ぶりだね」のような「数の提喩」もあわせて，提喩の「方向性」を考察する。

比喩の定義はできても，具体例についてどのタイプにあたるかの判断がなかなかにむずかしいことがある。たとえば，「足が棒になる」を「疲労のメタファー」とかんがえる論があったが，「足が棒になる」は「足がかたくなる」のメタファーである。「足がかたくなる」という事態は疲労にともなって生じるものだから，「足がかたくなる」は「疲労」

のメトニミーであり，このメトニミーを介して，「疲労」と「足が棒になる」とがむすびつくとかんがえることも可能である。比喩を「認知の御旗」とした「説明」は，明確な定義と，慎重な適用をこころがけないと野放図にながれる危険性をもつ。

意味分析にあたり，電子メディアから大量の用例をあつめて検討するタイプの論がある。Asako Iida 'Classifiers for Counting Actions and Events : Comparison between "kai" and "do"' (『東京大学言語学論集』18,1999.9) は，インターネット上の新聞記事および新聞記事データベースにもとづく大量の用例をもちいて，できごとの助数詞「回/度」のつかいわけを分析する。対照的に，すくないデータにもとづいて助数詞の「実態」にせまろうとするものに，中尾英子・宮島達夫「助数詞の実態――食品に使用された場合」(『計量国語学』22-1,1999.6) がある。中尾・宮島は，助数詞の記述には「規範/意識/事実」のみっつのレベルがあり，「規範より意識，意識よりも事実」が大切だといい，また，はなしことばを対象にしようとして料理番組をしらべても使用例がほとんどないため，「やむをえず，書き言葉を資料とすることにした」として，料理の本・スーパーのチラシにみる「事実」と，アンケート調査による「意識」とにもとづいて考察をおこなう。中尾・宮島はデータがすくない分，助数詞使用の個別的な事情にまでおよぶが，データ量の不足はいなめない。Iida はデータが十分でその結論にはうなずけるが，そのデータはかきことば，特に新聞データにおおく依存する。くりかえしになるが，研究対象にふさわしいデータとはなにかの吟味がもとめられる。

その他，個別の語の意味記述は，数はおおかったものの，意味・用法の分類・整理・報告におわるものがすくなくなかった。なかでも，類義の「副詞」「モダリティ形式」「接続表現」などについての論考にそのような傾向がめだった。そこになにがしかの一般的な言明，あるいは今後につながる示唆がほしいところである。ただし，実践的な言語教育を背景とした意味の記述は言語そのものの研究とは目的がことなるので，この説明はあてはまらない。もちろん，そうした記述のなかにも言語研究に資するものはありうる。杉村和枝・赤堀侃司・楠見孝「多義動詞のイメージスキーマ――日本語・英語間におけるイメージスキーマの共通性の分析」(『日本語教育』99,1998.12) はその一例である。

具体的な意味記述で，一般性を指向する，あるいは自説の位置づけを念頭におくなどしていて，今後の議論に参考になりそうなものを，さらにいくつかあげる。菊地康人「サエとデサエ」(『日本語科学』6,1999.10)，沖裕子「接続詞『あるいは』と『または』の意味について――談話展開機能の獲得にふれて」(信州大学『人文科学論集　文化コミュニケーション学科編』32,1998.3)，菅井三実「日本語における空間の対格標示について」(『名古屋大学文学部研究論集』45,1999.3)，高木一彦「単語のもつ意味特徴の階層性について――副詞のばあいで――」(『国文学　解釈と鑑賞』64-1,1999.1)，酒井悠美「無自覚の行為であることをあらわす副詞――つい，うっかり，うかうかと，うかつに，思わず，しらずしらず，無意識に――」(『国文学　解釈と鑑賞』63-1,1998.1)，牧野美智子「『知ル』の〈体験性〉にみる意味の焦点化の構造」(東海大

学『湘南文学』32,1998.3)。

語彙

田島毓堂『比較語彙研究序説』(笠間書院，1999.10) は，「語彙」という用語の「誤用」をきびしく批判し，「語の集合としての文字通りの語彙」の研究をすすめるべきだと主張する。「個々の語の研究ばかりが盛んで」「語彙研究といえば，ほとんど『語の研究』を指すかのよう」である現状が，「語彙」という用語の誤用につながるのだという。たしかに，「総体としての語彙の研究」は全体としてみればすくない。その理由はいろいろあろうが，個々の「総体語彙」からなにがひきだせるかがわからない，あるいはこの点での共通理解がないということがあるのではないか。

語彙を総体としてあつかおうとするたちばからは，しばしば「語彙研究は文化の研究と直接関わりを持ちます。いや，文化の言語的研究であります。」(田島前掲書)，「語彙の体系を明らかにすることは，一定の環境に生きる生活者の認識世界のシステム，すなわち価値に彩られた世界像を明らかにすることにほかならない」(室山敏昭『生活語彙の構造と地域文化：文化言語学序説』和泉書院，1998.3) といった見解がだされる。これに対して，語彙は「言語以外の世界との関係が密接であるので，言語以外の諸文化を解明するためにも，その研究が必要とされ，利用されることが多い」が，「言語学における語彙論は，語彙の究明自体が目的で，他には目的がない点に，その特徴と独自性がある」という見解もある (西尾寅弥「語彙・語彙論の問題点」『国文学　解釈と鑑賞』64-1,1999.1)。

「文化言語学」といわれるものは，人間の具体的な生活行動様式や生産物にかかわる語彙をおもな対象とする。そうした語彙に「文化」が反映されるのはたしかなことであり，具体的な記述をすすめることで，「文化」のある面をあきらかにすることができる。その一方で，ある特定の言語集団の文化をつくるのが，「その言語集団のもののみかた」であるとするなら，それは，めにみえる具体的な事物ではなく，一見してはとらえくいきわめて基礎的な部分 (モノ・コトを代表とする抽象名詞，機能語，文構造など) にも，あるいはそこにおいてこそ，より興味をひくかたちで，あるのではないかともおもう。池上嘉彦「〈モノ〉と〈トコロ〉――その対立と反転」(『東大百年』) は，そうしたみえない部分をあきらかにしようとする，示唆にとむ論考である。

「語彙」関係の論では，石井正彦「歌謡曲の聞き手はどんな単語を好むか」(『表現研究』69,1999.3) がめをひいた。これは，語彙調査を通じて，「流行」にかかわる言語的特徴の一端をあきらかにしようとするもので，従来みられた，できあがった作品の語彙調査でなく，「聞き手の好み」を中心にすえた調査の方法をさぐるところにあたらしさがある。玉村禎郎「動詞連用形転成名詞――現代日本語の基本語を中心に――」(『光華日本文学』7,1998.8) は，語彙教育に役立てるというたちばから，語彙の基本的な部分に転成名詞とその「原動詞」がどのくらいあるかをしらべ，「6060 語のうち，およそ 22 語に 1 語が転成名詞あ

るいは原動詞ということになり，転成名詞は現代日本語の語彙の基本的な部分を占める，重視すべき語群と見られるのである」という観察をおこなう。大規模な語彙調査の報告では，国立国語研究所編『テレビ放送の語彙調査III――計量的分析――』（大日本図書，1999.4）がある。天野成昭・近藤公久編著・NTTコミュニケーション科学基礎研究所監修『NTTデータベースシリーズ　日本語の語彙特性　第I期』（三省堂，1999.12）は「日本語それ自体および日本語を使用する人間に関する学術的研究の良好な研究基盤を提供する」という大部の著作だが，「準備と調査に時間がかかりすぎると予想された」ため，「単語や文字の意味をあえて収録対象としなかった」という。「自動車の『バス』と風呂の意味の『バス』とは，文字情報でも音声情報でも区別がつかないので同一の単語とみなした」「品詞が異なっても文字情報および音声情報が同じならば，同一の単語とみなす」などの前提，「作用反作用の法則」を「単語」とする一方で「気に入る」などは採録しないといった単語認定方法は理解しにくい。これをつかった「語彙論」の研究がどのようにできるのか筆者には見当がつかない。

用語・表現の問題

小野正弘「『意味本質観』と『意味情報観』――日本語の意味変化を考えるために――」（『鶴見大学紀要　国語・国文学編』36,1999.3）は，意味研究をおこなうには，まず「意味観」をあきらかにすべきだとし，「意味情報観」というとらえかた――意味を「単一的な本質」に抽象するのでなく，「重層・複合した『情報』の構成体」とみなすとらえかた――を提唱する。たしかに，「意味」は「形式以外のすべて」をさすことのできるきわめて守備範囲のひろい語であり，これをひとつの「本質」だけで説明するのはむずかしい。その点で，意味を「複合体」とみるかんがえは妥当である。小野は「意味という情報の構成要素」を「命名論的根拠」「現場指示対象・事態」「形成イメージ」「情的評価」「文体的特性」「位相的特性」とするが，これらすべてを「情報」としてよいかは疑問である。小野は，「パロール的なもの」と「ラング的なもの」との区別の必要性をとくが，語の「情報」として，「現場指示対象・事態」といった「発話の意味」にあたるものがふくまれているのが気になる。いずれにせよ，意味観の表明の必要性については筆者も同感である。

「意味」というひとつの用語がひとによってことなる対象をあらわすのと対照的に，おなじ内容にまったくちがう用語や表現があてられることもめずらしくない。対象がおなじだからこそ，「ひととはちがったいいかたをしたくなる」のかもしれない。「あたらしい理論」や「いままでにない，いいまわし」は，先人のいうことと実質的に大差がなくても，しばしば新鮮にうつり，ひとを感心させるわけだが，それもやがてはふるくなる。そのため，ひとはとかく「あたらしいものをほしがる」ことになる。ただし，「認知主義」の一部にみられるように，よりよい解釈をもたらすこともあるのだから，すじをみうしないさえしなければ，あたらしものずきはかならずしもわるいことではない。

説明のための用語や表現そのものも，主張すべき内容におとらずきわめて重要である。「日常よくもちいる用語」を説明につかうばあい，日常的な用法とのちがいがみえにくいだけに，さまざまな「誤解」あるいは「解釈のちがい」を生じる可能性がでてくることにとくに注意すべきである。その一例として「主観」という用語があげられる。この用語は「客観」との対比で，「モダリティ」の議論に頻繁に登場するが，その「意味」を十分にかんがえたうえで議論を展開するというタイプの論は意外にすくない。そのなかで，尾上圭介「文の構造と“主観的”意味――日本語の文の主観性をめぐって・その2」（『言語』28-1，1999.1）は，「“主観的”意味あるいは言表態度といったものが『モダリティ』と呼ばれる――そう思いこんでいる向きもある」が「日本独特の和製“モダリティ”概念は，本来のモダリティ概念とかけはなれたものになっている」と批判して，「主観的意味」や「本来のモダリティ」のありさまをさぐるもので，あいまいさを極力排除しようとするものいいが小気味よい。

「主観」のほかにも，たとえば「推量/推定/推測」などの用語が，なにをあらわすのかが明確にされないままにつかわれることがすくなくない。こうした語は，記述用に制限された特別の意味でつかわれる，メタ言語レベルの語である。「言語を記述する表現」がこのような性格をもつことを，つねにかんがえておくべきであろう。

以上，筆者のこのみのおもむくせまい範囲で，「なるほど，こんなみかたもあったのかとおもわず感心することを，だれにでもわかるように，すじをとおしてしめしている」論を中心にとりあげる，という基本的態度で展望をこころみた。

――聖心女子大学教授――